（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　　倉方 健作

19 世紀後半のフランスを代表する詩人のひとりポール・ヴェルレーヌは、一般に、具体的な状況に結びついた個人的感慨を精妙に歌う叙情詩人と見られている。しかしヴェルレーヌにはそうした面と並んで、むしろコンテクストを捨象し、自己意識を極度に薄めた境地に生まれる非個人的叙情――著者は文法用語を借用して「非人称的叙情」と呼ぶ――をめざす詩学が存在するという直観が、本論文の出発点をなしている。著者は、詩人のキャリアを俯瞰しながらそうした詩学の形成を跡づけ、晩年の詩人が最良の自作とみなし、今日の読者の間でも評価が高い初期の詩集『歌詞のない恋歌（ロマンス）』にその具体的展開を見る。

元来抑制された匿名的叙情を特質とした詩人が、ランボーを拳銃で負傷させ投獄されたいわゆるブリュッセル事件を境にカトリックに改宗し、以後信仰を核とした叙情詩と猥雑な官能詩を並行して書きつづけ、個人的な感情表現を旨とする叙情詩人像を決定づける。最晩年に至って非個人的叙情詩の抱負を語るものの、その具体的実現は叶わず、結果的には、四半世紀前に書いた『歌詞のない恋歌（ロマンス）』がそうした詩学の唯一の実践となった。――著者は概ねこのようにヴェルレーヌの創作史を把握したうえで、『歌詞のない恋歌（ロマンス）』の分析に入る。この詩集を構成する四つのセクション「忘れられたアリエッタ」「ベルギー風景」「Birds in the Night」「水彩画」は、パリ、ベルギー各地、ロンドンを放浪する詩人が、そのつど身を置く場所に触発され、それに見合った発想と手法を編み出しながら書き継いだものと規定し、最初の二セクションでは音楽、絵画との親近を示す手法を駆使して自己意識を非人称性のなかに融解させることに成功する一方、あとの二セクションでは「非人称的叙情」を貫くことができず、個人的叙情に堕したと裁断する。

「非人称的」という語に詩人の主観の稀薄化と詩的技法の客観性とを包括させる点に概念操作上若干の無理があり、ヴェルレーヌの事例を 19 世紀に広く顕在化する詩的自我の危機の問題として扱う展望を欠き、詩の読み方がときに掘り下げ不足であるなど、審査の場では弱点も指摘された。しかし本論文の美点は、詩篇のみならず、エッセー、書簡、同時代人のヴェルレーヌ観、現代批評のヴェルレーヌ論など、種々の資料を幅広く援用しながら詩人の意図を輪郭づける考証作業にある。とくに詩集の表題に関して、従来自明とされてきた、メンデルスゾーンのピアノ曲集《無言歌》*Lieder ohne Wolte* の仏語題 *Romances sans paroles* をそっくり借用したという説に異を唱える語義史的考証は秀抜で、この部分はすでにフランスの雑誌に発表され、国際的にも一定の評価を得ている。補論「『歌詞のない恋歌（ロマンス）』テクスト校訂の諸問題」、補遺である詩集全訳、40 頁に及ぶ詳細で有用性の高い書誌を含めて、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位にふさわしいものと判断する。